

平成31年1月17日(木)

老球の細道457号

始まり良ければ終わり良し

会津バスケットボール協会 室井 富仁

「毎日が大晦日、毎がお正月」をモットーにしながらも、なかなかその境地で生きることができずに早65年。今年もさらにその境地への思いを強くして2019年をスタートした。

スポーツ界は年末から年始にかけては全国大会が目白押し。バスケットボールウインターカップ、全国高校サッカー選手権、全国ラグビー選手権、そして新年からは全日本実業団駅伝、箱根駅伝。バスケットボールにおいても全日本選手権(オールジャパン)最終ラウンドがあった。トップアスリートたちは大晦日、正月もないのが宿命である。

そんなことを思うと、毎年お正月も家でのんびりとしてはいられなかった。現役時代は息子を連れ来てよく元旦バスケットボールに出かけたものである。誰もいない体育館で好きなようにバスケットボールができた。

噂を聞きつけて、会津高校、坂下高校時代の教え子たちが集まってきて3:3のゲームをすることもあった。オールコートで3:3は日頃ゆっくりしか走っていない私にとって、楽しみより苦行に近かったが今は楽しい思い出である。元旦にバスケットボールやトレーニングをすることは長年のルーティーンであるが、「始め」に対する誠意でもある。

ところで、日本のお正月に欠かせない風景は世界遺産になった「富士山」。そして富士山といえばその風景画で一世を風靡した葛飾北斎である。73歳で完結した「富嶽三十六計」、75歳で発表した「富嶽百景」は北斎晩年の傑作であり、ヨーロッパの画家ゴッホやゴーギャンにも大きな影響を与えた。

その北斎について、年末から読みかけの『年齢の話題事典』(東京堂出版)にプロフェッショナルとしての心意気も超一流である北斎のビックマウスが記されていた。

「自分は6歳ごろから物の形を写しとってきた。50歳頃からいくつも絵を世に出してきた。だが、70歳前に描いた絵はなんとも物足りない。73歳になってようやく動物、植物の構造や成り立ちがいくらかはわかるようになってきた。それゆえ、86歳になれば今より絵は上達するだろう。90歳になれば絵の奥義もわかってくるだろう。100歳になれば画業も神妙の域に達するだろうか。110歳になれば描いた1点が一つの命を得たかのようになるだろう。長寿を司る神様には、この私の話がいつわりの世迷い言ではないことをご覧いただきたいものである」

当時の北斎は超一流の浮世絵師として世間に認められていたが、そこに安住する気などみじんもなく、さらなる高みを目指していた。79歳のときには火災にあい、70年以上描きためてきた写生帖も消失してしまった。そのとき北斎は「私にはまだ筆が残っている」と気丈にも言っていた。死ぬ間際になっても「天が私に、せめてあと10年、いや5年でも長く生きながらえさせてくれるなら、真の画家になれるだろうに……」と最後まで創作への執念が消えることはなかったという。

なんの世界でも、高みを目指す人たちは年齢を言い訳にはしない。むしろ年齢が熟することによって極めることを目指す心意気を持つ。まだまだ物足りない自分自身を叱咤激励しながら2019年をスタートした。始まり良ければ終わり良しを信じながら。